

刊夕日三十月十



定価 一月五元 三月十五元 半年三十元 一年六十元
廣告料 五字一円 十字一円五角 二十字一円八角 三十字一円五角
日曜祭日の翌日休刊
発行所 常盤毎日新聞社
電話 六二〇〇
印刷所 常盤毎日印刷株式会社

今の紫

古代の紫 (四)

城山六八翁

兎に角に特殊の貴族的のやうな、ゆかしみのある紫根の古代紫は、永く世に残して見たいと思つたが、盛岡の紫草園で、紫草を種子から發芽せしむる事は、ナカノ、六つかしいとの話を聞き、其二十粒を當時の僑居、東京の庭内に蒔きしに、一本丈發芽して、三寸許までの高さで成長した。轉宅の都合上から鉢栽するとして、之を堀上げ恐るゝ、根元を圍ひて窺ひしに、人蔘の如き白い直根が露出して、然らざるところは、眞土が表皮か、不分明の者が附着して、目醒むる許り鮮麗のむらさき色を呈し、然して此根を圍んだ、眞土の厚二三分方は早やむらさき色に染まつて居つた！や、これは驚いた、此美しいむらさきの色！ハ、成程これが所謂ゆかりの色だ。傍廂前編に

紫の一もと故に武蔵野の、草はみながらあはれとぞ見る 古今集
とよみしも其故なり
紫のいろこきときは、
めもはるに野なる草木
ぞわかれざりける

伊勢物語

とあるは、みなからむらさき色を帯びたるをいへるなり、故に紫をのみゆかりの色とは云ふにやあらん

とも書いてある。そしてドウヤラ此歌の意味の了得を如實に私に提供して呉れた此紫草は、鉢上げした一時間日、二時間目と益々萎れて三日、四日の後には千秋の恨事、其生存が全く認められずなつてしまつた。如何なるゆかりか此ゆかりの色に、趣味を感じた私にと

ノート

クレヨン 書の下書に鉛筆を使ふと色づける時に色が牙えない鉛筆の代りに黄色のクレヨンを使ふとよい

つては、それは洵に千秋の恨事であつた。綿々として古代の紫を染め來つゝあつた。此紫根も時の流れと共に用捨も無く、やがては如斯染物界から失はるゝ事になるであらふ。
昔から歌にも澤山詠み込

まれた紫の色は、ホントに良い色だ。そして人造染料の中でも、酸性系のラナシールバイオレットの如きは、他染料の配合なしに、コックリした紫根の色も絹に染

【朝】いりとうふ、いと豆腐
【書】フインユラダ：鮮魚
【晚】煮びし：松茸 ねぎ
【朝】いりとうふ、いと豆腐
【書】フインユラダ：鮮魚
【晚】煮びし：松茸 ねぎ

茶粉のビスマーケラウンなど。早き時代の明治八年頃から前後して、日本輸入されて來たもので、爾來植物染料の紫根に代つて、目もはるの紫の、世界を支配して居る。然して今は此むら粉なども、外國同様に内地でも大概、矢張り炭タールから製出せらるゝ時代になつてしまつた。メシルバイオレットの木綿適用には、單寧の下漬を要するが、他の纖維は、直接に染付け得て、縮緬でも、モスリ

付けるもので、より華やかな色目で、堅牢のものは媒染屬アリザリンバイオレットで銘仙の矢筈飛白などによく見掛けむらさきの色は之れで染めたのだ。其他赤むらさきに酸性のアシツトバイオレット、青紫にアルカリバイオレット、重色には直接染料ヘリオトロピン等、等、幾多のものがあつた。然し艶麗其者ですべてのむらさきや此系統の色を、リードするものは、鹽基性の人造染料メシルバイオレットであらねばならぬ。之は古くはむら粉と呼ばれて粉状のものだが、其赤味豊かなものは、クリスタルバイオレットと呼んで居る。之は唐紅粉のメゼンタ、青竹粉のマラカイトグリーン、

か吉未申丑寅凶【三碧】忍効なき不平の日は忍耐か吉水火の難に注意して南北凶【四録】難別死別の愁話を聞く凶日なれば水火の難に注意して南北凶【五黄】病氣怪紛失の心配あるか移轉改革の念起る日未申丑寅凶【六白】金談縁談普請等進て吉唯長男長女の怪俄に注意東西凶【七赤】日賢者の應援を得て萬事好都合に轉するの吉日戌亥辰巳凶【八白】病氣怪紛失盗難の患ひのある日なれば萬事控目か吉【九紫】金談縁談其目上の信を得て吉判の日未申丑寅凶

うすあやの帳の中に紫の藤波つくるおん衣と髪と紫の衣など見れば束のまは變れる身とも思はれずして 全人 (完)

【一白】金談や望事に奔走の用する日目の下の男女の怪俄に注意東西凶【二黒】病氣怪俄紛失に注意して萬事控目

看護婦急派の求めに應じます
平町南町
平看護婦會
電話三〇七番

木村外科醫院
平町五丁目橋際
電話九〇三番

新 出賣節雙

かまぼこ製造
お惣菜用
平町一丁目
吉原揚
電話一四一番

高久病院
院長 醫學士 高久 忠
副院長 新潟醫學士 赤羽 清
藥局長 藥劑師 佐竹 菊雄
内科小兒科 外科花柳病科 耳鼻咽喉科 レントゲン科
平町田町 電話五一三番

魚問屋
店理代平命生本日大最優最
榮盛賀志
(三一電)目丁四平

交通恐怖時代現出?

腐れ橋五十を算す

平土木監督所最近の調査

改修急を告ぐ

平土木監督所では最近管内町村の腐朽橋梁から各種の交通事故が繁発するに鑑み本日全管内の腐朽橋梁を調査した左記の如く實に五十一橋の危険橋梁のある事が判明したので同所では直に是が対策として漸次換替工事を行ふ一方平署と協力して當分自動車は二百四十貫、馬車百三十貫以内の積載重量の制限を行はしめ事故の防止に當る事になつたが各町村の腐朽橋梁左の如

- (入遠野)上根口橋外十一
- (川部)三澤橋外四(上小川)中川橋外五(上遠野)根峯橋外三(荷齒夫)木和田橋外二(三坂)澤小屋橋外二(石住)仁田橋外二(山田)君田橋外一(植田)鳥場橋外一(泉村)入帆橋外一(澤渡)穴橋外一(好間)水車場橋(水戸)熊田橋(小名濱)柳形橋(大野)霞田橋(草野)六十枚橋(川前)廉又橋

宇都宮輜重大隊

小名濱を引揚ぐ

今日午後平驛から歸隊

既報石城郡小名濱、玉川方面で演習中であつた宇都宮輜重十四大隊は昨日を以つて豫定演習を終了したので本十三日朝小名濱町を出發午後三時平驛前廣場に到着

平驛より午後九時十二分發の臨時列車で人員百七十四名馬匹百三十三頭が歸營する事になつたので平在郷軍人分會では兵員の休憩並に馬匹の給水等に盡力した

賑つた今日の

第一校運動會

秋晴れの運動日和に恵まる

既報平第一小學校の秋季運動會は本日午前七時半より

同校グラウンドで開催、國旗掲揚の上國歌合唱をなし篠

た、因に正午迄に涉ける各學級の一等受賞者は左の如くである

- (七十米)一ノ二瀧本正四郎 一ノ三藤田篤次 同柴田照夫 同渡邊敏雄
- 同鈴木敏明 一ノ四高倉正一(百米)二ノ一川崎繼男 二ノ二齊藤吾一郎 二ノ三藤井喜一郎 三ノ一田山孝平 三ノ二大谷敏雄(二百米)四ノ一馬目國男五ノ一篠山達司 五ノ四白土健 六ノ一佐藤喜一 六ノ二山崎福次郎(四百米)高二ノ一瀬戸利雄 同二ノ二井上朝

四倉爾市場は十五日閉場

昨今の相場は依然安

四倉爾市場昨十二日の取引實数は二百三十七貫六百十匁最高三十六圓九十錢、最低三十圓四十錢、馴三十三圓十九錢と依然値下り模様であるが出廻りも幾分過ぎ出荷も益々減少する許りな達して居ると

縣大會に臨み

必勝を期す

平署武道部が猛稽古

平警察署では来る廿三日福島武徳殿に於いて開催される縣下警察管の武術大會には柔剣道共優勝を期すべく今回左記腕自慢の候補者を選定して當日午後三時より道場で猛練習中であるが出場選手は練習中の成績によ

- つて決定する筈である
- (劍道)渡邊 室井 高松 吉田 佐藤 大谷 高松 鈴木 桑原 高子 菊地 (柔道)福田 宮内 古山 菅家 二瓶 金澤
- 豊間青年總會 石城郡豊間青年團では来る十五

士官校希望激増

非常時を物語る

警中の記録破り

警中に於ける近年にない大激増を見せる十二月四日より四日間試験を行ふ士官學校及び一月十七日より三日間試験を行ふ幼年學校の志望者は士官學校十七名、幼年學校十名計二十七名であるが同校では昨年士官學校への合格者が僅か一名と云ふ不成績であつた所から今年は之れを恢復すべく極力指導する考へである

郡南山間部に

椎茸栽培普及

郡農會極力斡旋

石城郡入遠野荷路夫等山間部落では山村經濟の更生策として各種の副業が盛んに行はれ最近では椎茸の栽培が多く殊に年收四百餘圓に達する佐川式椎茸栽培法を

安價で効果的な天然加里肥

最も適應する作物!!

蔬菜 馬鈴薯 里芋 じゃが類
茄果類ではトマト、茄子の如き比較的病害に弱い作物に施用すれば抵抗力を興へ落果を防ぎます
天然加里肥は酸性でないから如何に施用しても土壤を惡變する虞は絶対にありません

一俵 參拾錢 (大量取引は特に割引致します)
製造販賣 金成國雅
平町鎌田(電話六八八)

ト ラ ッ ケ
貨物自動車の御用命に應じます

改選を行ふと

- (書方)二年太田二三子 三年柴田離苦子 四年木田英子 五年根本ツネ子 六年大和田智恵子 高一大野文子 高二玉木靜(圖書)二年鈴木ヨシ 三年佐藤ハナ 四年小松ミサホ 五年飯塚サト子 六年石山小夜子 高一廣澤芳枝 高二渡邊ヒデ
- 小名濱農會 石城郡小名濱農會 濱町農會では来る廿六日午後一時より同町小學校に於いて秋作收穫に就いての講習會を開く

稀代の放火魔

遂に平署に檢舉

平町月見町火防組合長の

伊藤喜一郎(四一)

既報平署では本春三月以來平町東部新川町、月見町方面に於いて原因不明の火災が頻りに起つたので同署では早くも放火と疑ふ犯人の檢舉に死力を盡して捜査せる結果本月六日有力な物的證據を得たので八日月見町二七酒小賣業同町火防組合長伊藤喜一郎(四一)を被疑者として引致し川島司法主任以下安藤刑事部長が連日連夜嚴重な取調を行つた結果去る十三日午前一時伊藤は遂に包みきれず放火犯行として本年二月十五日月見町野木善太郎所有佐藤吉松方留守宅に放火して以來八月廿三日同町加藤多四郎方物置を全焼せしめる迄に前後十一回に渡る放火事實を自白したので約半歳に渡つて平市民を恐怖せしめた問題も解決するに至つたものである

働さを見せたさに

無暗に放火

平署苦心の檢舉

放火魔伊藤は飯野村大字北白土字上白土幸次郎三男で十年前記の箇所に酒小賣業を営んだ者で放火するに至つた原因は三年前火防組合長に任命されるや組長手當年十餘圓を一躍四十餘圓に増額せしめた手前組長としての活躍振りを見せながら爲め損害十餘萬圓の放火をし取調係官を驚かしたものであるが同署の犯人檢舉は從來にない苦心の跡を見せ八

十六週年記念日に當るので國旗を掲揚し各校長講演をなした

河村大佐を迎へ

警中、平商校査閲

軍事講演も試む

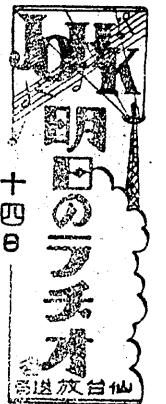
若松二十九聯隊河村大佐は昨日來平、本日は午前八時より平商に於て左の如き細目に就き學校教員の査閲を行ひ終つて軍事講話及び配屬將校を始め各教諭と教練振興に就いて種々懇談をなしたが明日は警中に於ける學校教練の査閲を行ふと(四年以下)射撃姿勢及動

子供達は

どんな本が好き?

讀書の秋に第二校の質問

讀書の秋を控えて子供にどんな本を読ませたらよいか又讀書の嫌ひな子供に如何にして讀書の良習慣をつけるかに就いては子供の父兄も學校の先生も等しく考慮してゐる所であるが、なか



今晩の部
後六〇〇 子供の時間
少年運動講座(第三日)野球の見方、方太田四州
後六二五 基礎佛語講座
(二〇)目黒三郎
後七三〇 講演「鐵道記念日を迎へて」鐵道大臣三土忠造
後八〇〇 舞臺劇「伊勢

今晩の部
音頭變遷 伊勢福岡孫大夫宅代々講の場、尾上伊三郎其の他
後九〇〇 清元「道行深時鳥」浄るり清元梅太夫其の他
後九五〇 日本棋院秋季東西大手合戦續
後九三〇 時報ニユース氣象通報 番組豫告

明日の部
前六三〇 基礎佛語講座(十四)橋本忠夫
前九一〇 料理献立「ピマーズ」シムバキ「青唐辛焼」成田玉純
前一二〇 家庭講座「お婆の手入」牛山喜久子
後〇〇五 映畫物語「恩讐變化」梅庭欣哉 三田春輔
後一五〇 野球試合實況 東京大學野球聯盟リーグ戦「法政早稲田」神宮球場より中継
後二〇〇 家庭講座「社

會の發展と結婚の意義」田中孝子
後五三〇 職業紹介事案
後六〇〇 讀本の兒童劇「熊襲征伐外二」東京兒童藝術協會
後六二五 記念講演「王政維新の回顧」田中光顯
後七三〇 時事解説 鶴見祐輔
後八〇〇 歌劇(新交響樂團練習所より中継)與田良三外 管絃樂日本放送交響樂團 指揮ニョライシフエラブラット
後九〇〇 新日本音樂「春與外三」小林操榮外

平職業紹介所報告

回人を求める方

- △大工 三名 四十迄 尋
- △日給一圓(湯本町某)
- △外交員 四十五才 尋卒
- △割給(平町某)
- △豆腐賣子 三十以下 尋卒
- △賣上の二割給(平町某)
- △農夫 四十以下 月十圓
- △外面談(平町某)

回職を求める方

- △事務員 二十三才 佐賢
- △給料面談(平窪村某)
- △洋裁見習 二十才 尋卒
- △給料面談(好間村某)
- △自動車運轉手 二十二才 高卒
- △給料面談(平町某)

平町人事

回出生

- △播穂小路一八 當時田村
- △那三町清水五一 鈴木
- △一夫氏長女久美子

偽電氣會社員に懲役二年半求刑

判決は来る十九日

山積した

各商店の寄贈

宮城縣遠田郡大字不動堂生れ目下住居不定無職猪股時雄(三)が去月二十七日午前十一時頃神谷村大字中神谷瀬戸四三志賀與四郎方に至り東電の外務員と詐り點燈の違反を内濟にするからと酒肴の饗應を受けた外警崎好間植田町方面に於て前後二十九回に亘り物盜詐欺恐喝を働いた事件の公判に昨日午後一時より平區裁判所に於て香西判事係り清田檢事立會の下に死廷され檢事より懲役二年六ヶ月を求刑されたが判決言渡しは来る十九日午前九時である

- 別項第一小學校運動會に際し各賞品寄贈者は左の如くである
- 大塚運動具店 マルトモ
 - 書店 同運動具店 西澤
 - 書店 中屋洋服店 大日
 - 本雄辯會講談社 岡屋商
 - 店 日本鉛筆製造會社
 - 王様商會 内池商店 佐
 - 々々木商店 藤田専吾 山
 - 野邊昇 山崎活版所 宍
 - 戸屋 鈴木豊次 大一屋
 - 山家メリヤス店 瀬尾藥
 - 店 鈴木勝彌

銘劍秘刃録

【禁無斷轉載上演映畫】

寶井馬琴 演
山本英春 畫

第六十三回 血に飢ゆる村正

さあ撲れ殺せ

横町へ行つて來ると出て行つたお紺は間もなく風呂敷包みを抱ひ込んで歸つて參りました、次郎吉は何を持つて來たと聞いて見ると白無垢が一枚入つて居ります

次「何だ縁起の悪い」

紺「宜いから次郎さん南無阿彌陀佛と書いてお呉れお前は醫者の子だといふから其の位の事は書けるだらう墨もこしらへて置いたから一寸書いてお呉れ」

次「氣でも狂つたのか白無垢へ南無阿彌陀佛と書きやア何うするのだ」

次「お前が金が費るといふから夫で一狂言して見せるのだから黙つてお書き」

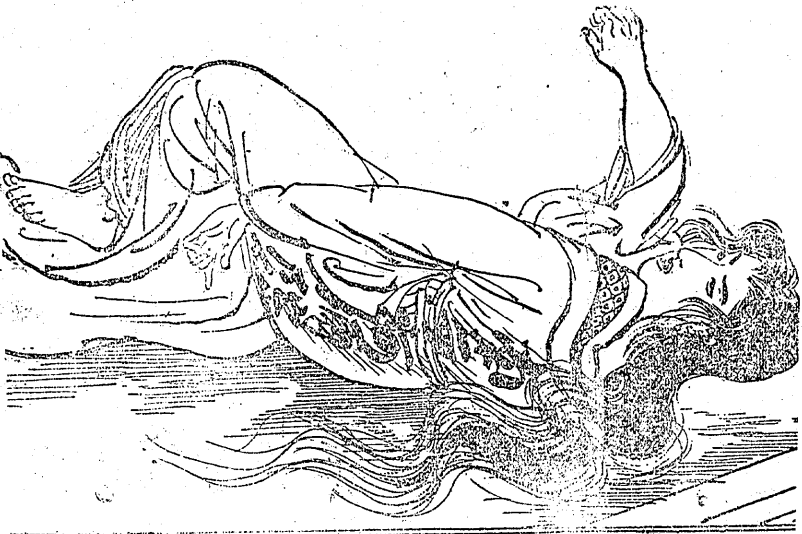
と無理に南無阿彌陀佛と書かして其の白無垢を下へ着て其上に平常の着物帯をべて居る所へ女中は歸つて參りました

女「内儀さん往けませんよ怒つた事のない旦那様が今日は大層お怒んなすつて月々の物もないものだあれつきり往かないのを喜びもせず勝手な事をして居ながら金を遣はせもないものだから仰しやつて手紙を破いてお

返しなすつた」

紺「然うだらうお前は御飯でもお食べ次郎さん待つてお居て今お金を持つて來てあげるから」

と其儘出て行く様子跡へ殘つた次郎吉は何處へ行き



やアがるかと思つて居る中江戶節おこんは仙臺の御通門へ參りました黙つて通らうと致しますから門番は之を認め

門「コレノ、何處へ通る」
紺「何だエ何處へ通つても」
門「ぢやアないかお前は生

つて門の外へ出さうとする
と豫て巧んで來た江戶節おこん突然上着を脱いでしまひ白無垢に南無阿彌陀佛の散らし書簪を抜くと固より洗ひ髪の手でございますから髪は毛はバラバラになる打ちもしないのに源の

入口に大の字なりにふんごり返り
紺「サア寄つてたかつてぶちやサがつたな誰たと思ふ江戶節のおこんだ濹江右膳へ人を遣れ右膳の妾を此奴等ア酷い事をしやアがつたなサアもつて打て殺して呉れ」

と女の金切り聲に門番も持て餘しました内々濹江右膳の妾といふ事は門番も知つて居りますゆえ一人濹江右膳殿へ出て右の由を申上りましたので右膳は驚き此事かお目附の耳へでも入れば腹切り道具だと早速上總部屋の前頭墨染源次を呼びにやりました源次は御留守居からの迎ひと聞いて直に參りました

源「エー旦那様何御用でございます」
右「源次や誠に迷惑の事を頼みたい」
源「どんな事でございますか」
右「實は通用門へ參つて暴れて居る女の事だ」
源「今一寸聞きましたがあれア江戶節のおこんといつて却々海に千年山に千年陽氣を伺つて天上でもしやうといふ悪婆でございます何だか旦那に御世話になつて居るなど、申してゐるさうでございますが全くでございませぬか」
右「面目ないが實は外妾に致して置いたのだが」
と委細の話を聞き取る源次

源「そりやア旦那とんだ者にお引ッ掛んなすつた覚えがあつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

紺「サア何したんだ殺さねえのか打たねえのか生殺しにして置かれちやア仕方がねえ」
と大聲を上げて云ふので御門前は人の山をなし門の内では家中の人も山の様に
出て見てゐるところへ
源「姐や一寸起きな然んな所へ寝てゐると冷えるせお前の狂言通りにしてやるから然んなに騒ぎなさんな」

があつて見りやあ仕方がねえ五十兩お出しなせえ」
右「五十兩で宜いか」
源「エー御身分がなげりや一文も入りやアしませんか御身分柄で仕方がございませぬ」
右「どうか此の後參らぬやうに確と其の方からして貰ひたい」
源「此の後は仙臺の屋敷の方へ足も向けさせる氣遣ひがございませぬ私も墨染源次で此の段はお受合申します」
と右膳から五十兩受取り金を懐に入れて通用門へ來ると

服倉小黒 賣出し

小學生 中學生 小學生
中學生 中學生 中學生
特製A 特製B
三圓五十錢 三圓六十錢
三圓二十錢 三圓二十錢

平町 正札堂洋服店

木村病院

平町新川町十九
入院隨意 病室完備

電話一六四番

産科 婦人科 外科 藥局

院長 木村寅次郎
醫學博士 内木宗八
藥劑師 玄番彌一

太陽顔ソース

一本日質品 スーツ顔陽太

御存知ですか!
太陽顔ソースの風味を!!!

平一丁目(電話三三三番)
小川屋本店
平各販賣店

是非御試下さい